

藤原行光考

——土佐派研究の一節——

谷 信 一

土佐派の研究に就ては、種々の方法があるけれど、作家を中心とした把握法が最も簡明直截であり、且又現在の所では最も必要とせられるやうである。そこでその方法で少しく調査した成果を綴つてみることにするが、この場合には、まづ土佐派の起原論が先行しなければ妥當を缺き、且又時代順に發表するのが適當であるけれども、ただ單に筆者の便宜のために、その順序を踏まらずして題目とする作家の年代は隨時前後する。

一 畫史類と行光

江戸時代に於て行光は如何に觀られてゐたかといふことは、結局は畫史畫譜の類書を繙ぐことが一番早徑であらう。しかしこのことは誰人にも容易な業であつて、敢えて貴重な紙數を費やすに値しないことであるけれども、序述の便宜と一二の新なることに觸れたために附加する。

かの丹青若木集には未だ行光を著録せずして、而も「土佐氏系圖」

なる小系を掲ぐるに光信から以てし、なほ「先祖未勘知」^{註一}と註を施こしてゐるが、續いて本朝畫史に於て「經隆子也、任越前守、延文六年爲繪所」と記載してゐる。この二畫史の筆録者が狩野派畫人であるといふ條件があるにしても、この江戸時代初期に於ては、行光に就ては正確なことが殆んど判つてゐなかつたといふことが出来るし、このことは更に江戸時代を通じてさうであり、古畫備考や扶桑名畫傳に至つて些少の知識が増加してはゐるけれども、決定的なことには終に及んでゐないのである。

行光の何者であるかが確定しないけれども、その判らぬままに、江戸時代中期以後に於ては行光その人への關心なり知識なりは普及してゆく。それは特定の個人行光に限つたわけではなくして、土佐派及土佐家の復興といふ問題の中に含まれて現はれたものである。その結果を最も具體的に證示するものは、いわゆる「土佐家系圖」なるものの成立である。これに關しては別に一節を設けて説く豫定

であり、又嘗つて聊さか觸れたこともあるが、^{註二}これには數種の異本があり、その形式にも氏文と模系圖との二種がある。そこでこの土佐家系圖とそれを中心とする考證學者の辯との種類のものにあつては、行光は如何に取扱はれてゐるかと言へば、それは矢張り根本に於ては前述のこと以上には殆んど出てゐないとも言へるけれども、更に多少の傳説的なことが畫歷を中心にして増加してきてゐることは自然の順序である。それを分類してみるといふと、主なるものは次の三種になる。

一 光國の長男、行廣の兄、光重の父（地下家傳、土佐家系圖の甲乙丙の三本）^{註三}

二 吉光の男、行廣及光重の父（圖畫考、倭にしき、土佐家系圖丁本）^{註四}

三 光顯の子、行廣及行秀の父（土佐家系圖戊本）^{註五}

其他に二三の相異があるものもあるけれども、要するに系統的なことは以上の三説を主なるものとし、その閱歷に就ては本朝畫史以來の越前守で延文頃となす以上には出てゐないのである。しかし幸にも、この延文頃となす説は全く正しいのであつて、それが傳説的にも信用せられて流布してゐたといふことは、行光觀をして時代的に常に確固不動ならしめた原因となつてをり、且又後述の如くに堀直格をして肯定せざるを得ざらしめてゐるのである。しかしこれだけの知識は、既に室町時代からして一貫して行はれてきてゐるもので、光信自身も明らかに貞治六年の作品を以て行光の筆と鑑識し、

或は西三條實隆も長享三年^{第三項の註一参照}に於て百四五十年以前の人と認定してゐて、時代は全く合致してゐる——ただ春日繪所などといふ餘分な言葉を用ふる所に誤謬があるにしても——。随つて時代的位置だけに就ては古くからして一貫して正しく認められてゐたと言へるであらう。

さてこの土佐派或は土佐家と言へば、直ちに家系的なものを聯想する觀念があり、又それ故にこそ土佐家の特徴があるのであるから、この家系的なものへの反省は、當時の考古家に取つては當然起るべきものである。殊に土佐家系圖の發生そのものに人工的作爲があつたがために、これに對する第三者が、そこに多くの矛盾を看取するのは當然である。しかしその矛盾を解決し得ずしてその矛盾のままに或は傳説の通りに記載するものが過半である中であつて、終に堀直格の説の如きが出でたといふことは、著るしい進歩であると言はねばならぬ。けれどもこれとても決して建設的なものでなくて、疑問を否定したことが良心的態度であるといふことに歸着するけれども、その要旨は次の如くである。^{註六}「畫史畫系類に延文頃の人とあるからして、その頃に行光といふ人が土佐家にゐたのであらう」と消極的にその存在を認め、更に「吉光の子であるとか一遍上人繪傳の筆者であるとかいふことは全く僻事である」と述べて、系統や畫歷の傳説を積極的に否定してゐる。

この堀直格の説は全く正鵠を射たものであつて、私が述べたいことも一言で云へばそれに盡きるといへるかも知れない。なほ彼の畫

業に就ては氏文系譜や其他に數箇の作品を列舉してゐるが、そのことに就ては後項に於て觸れることにする。

註一 この言葉は本朝畫史の説ではなくして、他の引用であるが、何れ「土佐家系圖考」の時に觸れる。

註二 昭和十三年四月、浮世繪同好會講演。

註三 土佐家系圖の異本を甲乙丙などと名附けたのは、私の便宜上の假稱である。

〔地下家傳〕 行光國男、號土佐

從四位下、大藏少輔兼左近衛將監、畫天滿宮緣起眞筆一卷、至今在、又傳寫在家、御屏風調進之、又畫手長脚長、延文五年十二月二日、貞治二年正月廿八日、丹波國領地之事、下司公文職之事奉書傳來。

〔土佐家系圖甲本〕 地下家傳と殆んど同一。

任越前守 ○行光國男、號土佐

延文五年十二月二日、貞治二年正月廿八日、丹波國領地之事、下司公文職之事奉書傳來、畫天滿宮緣起、眞筆一卷至今在家、又傳寫在家、大嘗會悠紀主基屏風調進之、又畫手長脚長、天滿宮御傳曾展版、殘決ヲ集テ一卷トナス、古色可掬。

〔土佐家系圖乙本〕

光國 行光（劉註へ前者下同） 行廣（光國二男、行光男、ナレバ略ス）

〔土佐家系圖丙本〕

光國 行光 光重
行廣 行秀

註四 〔土佐家系圖丁本〕

吉光 行光（越前守、延文頃） 行廣
光重

〔倭にしき〕 これも結局は土佐家系圖の一本として扱ふべきが當然であるが、暫らく書名の如くにして置く。

吉光 光顯（吉光男、越前守、延文頃） 行光（延文頃） 行廣

〔圖畫考〕

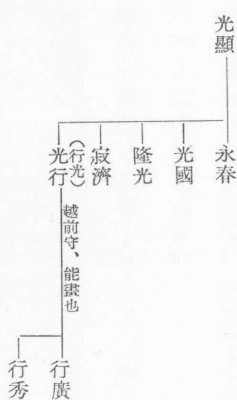
吉光 光顯 行光

藤 原 行 光 考

土佐越前守行光〔實吉光男、延文頃〕

爲光顯長子嗣本家、都誓願寺緣起大幅、四條道場一遍上人繪詞○中、北野天神緣起、義經群高松、太子傳繪三幅、高野山弘法緣起、兒文殊、天狗草子繪○中、羅漢畫。

註五 〔土佐家系圖戊本〕



以上の諸本が系譜として血脈的な家系を意味してゐるかどうかは重要な問題となるものであるけれども、氏文系譜に於ては血統上の意味に對應翻譯して用ひてゐるやうである。

しかしこれは佛師系圖と同じく、畫系と家系との間に、明確な辨別意識を以て作製せられたものでないことは論ずるまでもなく、そこに面白味も存するのであるが、詳しくは後節に譲る。

註六 〔ゆめのたぐち〕 本書は土佐家歴代に關する考證であり、換言すれば土佐家系圖への研究であつて、その結論は同系圖は隨處に誤謬に満ちてゐて全く信憑し難きことを言つてゐるのである。ただその考證方法に於て、その名編たる「扶桑名畫傳」に收録せる史料をも使用してゐないことが憾まれる。なほ同氏の著「倭錦顯文抄」をも参照されし。

二 行 光 傳

以上に於て江戸時代に於る行光傳を紹介したのであるが、今の私の手に於ては、それをどこまで敷衍し得るか。管見の範圍では延

文五年十二月二日附の足利義詮の御教書註一を遡ることが出来ない。それは、行光領有の丹波國大芋社が押領される難に遭ひ、行光の訴えによつて幕府は該地を改めて彼に施行せしむる旨のものである。この地は其後三年を経て再び同様の難を蒙つてゐることが、貞治二年正月廿八日の施行狀註二によつて知られる。

この延文五年の文書には「繪所越前守」とあり、それは繪所預の意味であつて其他の場合にも同様である、貞治二年の文書には「繪所預越前守」とある。そこでこの期間は繪所預に補せられ、越前守に任せられてゐたことを確實にするものであるが、私共の最初に知り得る行光なる畫人は、既にかくも完全に獨立したる社會的地位に上つたものとして登場するのである。而してその年齢もやはり中年をすぎてゐることは推測に難くないところである。

これと共に注意すべきことが残つてゐる。それは後者の文書中にみる「去文和延文度々施行之處」なる語である。この延文とは延文五年の前記の御教書に相違ないけれども、それ以前にも文和年間に於て同じく押領事件があつたことが知られる。その訴人が行光であつたか、或はその前任繪所預者であつたかは斷定し難いけれども、かかる場合にはまづ行光その人の在職中とみるのが妥當のやうであつて、想像が許されるならば、この文和の文書も土佐文書の一群の一通として傳つてゐたのが、何時しか散佚したものであらう。若しそうであるならば、文和年間には既に繪所預として在職して、この文和を元年とすれば八年、最末の四年とすれば五年をば、前記の延

文五年から更に遡り得るといふ甚だ重要な手懸りとなつてゐる。

ここにみる繪所預領たる丹波國大芋社オクモの問題は後にも出るところであるから、その折に廻すことにするが、さて第一項に觸れた如くに、行光を以て延文頃の人となし、越前守に任せられたといふことは、江戸時代の畫史類に多く説く所であつて、それは全く正しいことであると言つたのは、即ち以上の二文書と照合するからであり、この土佐文書を土佐家或はそれを巡る何人かが根據として、かかることを説き、そのことが終には土佐文書を未だ見ず或は知らない多くの考古家をも支配することになつたのである。而して本朝畫史の「延文六年爲繪所」はまづかかる所からの訛傳であらう。しかし乍ら博引傍證の堀直格すらも、この土佐文書の存在を佚したことは彼の微瑕であつて、終には「ゆめのたゞち」をして單なる「圖畫考」への惡罵たらしめて、その内容に客觀性を持たしむる根據を薄弱にし、延いてはその主張を消極的ならしめてゐるのである。

この貞治二年から三年後の同五年には、行光は極樂寺本尊である足利義詮等身像を奉居するために働らいてゐる。『岩清水八幡宮記註三』に次の如くでてゐる。

貞治五年卯月十九日天晴、極樂寺本尊御下也、爲奉居之繪所中御門越前守御門越前守藤原行光、佛師大貳法印院廣、故院吉法印子也、令下向、御莊嚴カ以下沙汰之天奉居畢、今夕酉戌兩時之間安置之、殊儀式無之、自今夜供僧預承仕等奉守護之、件御本尊者將軍家御等身也、皆金色來向座像也。

この記録によつて、行光はなほ繪所預であり越前守であることを

知るけれども、この史料が他のものに比して著るしく重要な問題を暗示してゐるといふことを看取し得る。その第一は彼の氏は藤原であるといふことである。その第二は彼が佛師院廣と共に併記されてゐるといふことである。それは、表面上では宮廷繪師と木佛師との共働だけにすぎないと受取られるかも知れないが、若し佛師の問題に興味を有する者ならば、もう少しここから問題を發展せしめて考へることが可能である。即ちこの貞治年間に於て、この佛師院廣の父なる院吉は、等持寺大佛師職に補任せられ、そのために丹波國國分寺地頭職に補せられてゐる。而してこの院吉の後繼者は代々それを受繼してゆくのであるが、ところが室町時代特に光信に至つて、その理由はともかくとして、國分寺は終に土佐家が繪所預領として領知することになるのである。即ち土佐家の所領の問題に即して考へ直すことが出来るのであつて、佛師院吉後繼者は終に土佐家に壓倒されてその所領を失ふに至るわけであるが、ここに當代に於る繪師木佛師の勢力の消長情相が端的に示されてゐるものであり、光信が土佐家中興の祖として確固たる地盤を築いた效績の威大さが認められるのである。それはそれとして、ここにいふ行光時代にあつては、その問題が惹起してゐず揃つて共に働いてゐて、このことは後にも觸れるが如くに土佐家の成立に對して消極的な一史料をなしてゐる。第三は中御門なる語の示唆する内容であるが、これこそ土佐家に取つて最も貴重なる史料であつて、次の行光の諸問題の項に於て觸れることにする。

その翌正平廿二年^{貞治六年}七月には、外題を藤原行忠、詞を藤原業清が書ける地藏靈驗記繪卷六卷を描いてゐる。これは永享十年の記録^{註四}であるけれども、それには、

外題參議正二位行侍從藤原朝臣行忠卿

清書散位從四位上藤原朝臣業清

繪々所散位從四位上藤原朝臣行光

但大進法眼善祐書之云々

貞治丁未孟秋上澣

權中納言藤原朝臣爲秀

といふ奥書があると記してゐる。この記載法は奥書としての完全な形式のものではないから、筆錄者の手によつて多少の變改があるものと思はれるけれども、何れにしてもその事實のみは肯定せざるを得ない。この繪卷は「殊勝繪也、地藏靈驗記流普繪ニハ聊替所あり、同事もあり」と説明されてゐるが、本篇で掲げる諸史料中で唯一の作品關係の史料である。また同じく行忠の詞書で義經泰衡征伐繪卷十卷も描いてゐると認めてよいやうである。

なほこの年の畫業の一として參考に掲ぐべきことは同年三月廿九日の中殿御會の有様を屏風に行光が描いたといふ土佐光信の説^{註五}である。而してその詩歌は爲秀の書であると爲廣が説を立ててゐる。そうすると前記の地藏靈驗記繪卷や泰衡討伐繪卷などと書畫共に同筆者であつて、時代的にも可能性のあることではあるが、如何に光信

の鑑定に客観性があつたにしても、何しろ百數十年後に於けることであるから、遽かには採用されなれないと思ふ。

この貞治六年の十二月に、義詮が歿し、その翌年四月に義満が一歳で元服の式を挙げ、同十二月に三代將軍の職に就くが、その元服の折の櫛手巾註六に行光が繪を描いてゐることが知られる。また其他に調度品類の繪畫の仕事にも關係したのであらうと思はれるけれども、それは想像の限りでない。

この翌々建徳元年應安三年六月廿七日に、内裏の御修理があつて、そのために青蓮院入道尊道親王をして安鎮不動法を修せしめられたが、その時の御本尊圖畫の事に行光が從つてゐる。註七先例によればかかる場合は何れも繪佛師に仰せあるのであるが、この度に限つて宮廷繪所預行光に命ぜられたことは如何なる事情によるのであらうか。これを以て行光の重用とまで考へるのは越權であるが、何れにしても、西山宮御抄圖に本づいて絹二幅に安鎮不動法の本尊曼荼羅圖を描いて、紫宸殿中央の母屋を道場として行はれた安鎮法の本尊たる御用を果してゐる。而してこれは其後焼失したであらうことは明らかである。私はその仕事の如何よりもなほ未だに彼が繪所預を占めてゐることにより興味を持つ次第である。

その翌建徳二年應安四年八月廿八日の事として、吉田兼熙が珍らしい

註八記述をしてゐる。曰く、

今日、繪所刑部少輔行元家、鎮守勸請事、談合行持之間、奉遷沼戸大副書遣之云々、繪所領丹州大芋社ヲクモ云々、彼社神名帳多紀郡櫛石窓神社二座並名、神大、彼額道風書也、櫛石窓豐石窓神云々、式文二座云々、一座者豐石窓神歟

これによつて、當日行光の家、それは京都の何處であるかは全く知る由もないけれども、その屋敷内にその領地大芋社から鎮守を勸請したことが知られる。その祭神は本文でも神名帳を引いてゐるが如くに、櫛石窓神と豐石窓神との二座であつた。この神社は現在も櫛岩窓神社として傳はり、櫛岩窓命と傳ふる二神と大宮比賣命と傳ふ一神との三神像が傳はり、夙に國寶に指定せられてゐるがために少しく聞ゆるところである。この現在の櫛石窓神社の所在地たる兵庫縣多紀郡大芋村こそは、行光が繪所預領として與へられてゐたるもので、且又前掲の土佐文書によつて知られる如くに再三に亘る押妨に遭つた土地であつたのであるが、この頃は差したる濫妨も蒙らずに領有してゐたらしいのである。

又それと共に彼は刑部少輔であり、なほ行光が繪所預であることを語つてゐるが、不幸にしてこの年を以て彼が繪所預として現はれる最後の年としなければならぬ。しからば彼は其後も何時まで在職し果又何時まで生存してゐたのであらうか。ここに次の史料の重要さが認められることになる。

それはこの建徳二年から十八年後である康應元年十二月二日のこととして『畠山記』註九なるものに著録されてゐる事柄である。

康應元年己巳年十二月二日、義滿公御所へ還御なさる、繪師越前守行光入道閑樂、其子越前守光重兩人を、畠山左衛門佐基國、河州に召して國中の地利を改め、殊には八尾の城、飯盛の城、龍泉の城、微細に圖せしめられ、一句に成就せさせて、右三城の大將におくらす。

普通に考へれば、如何にも自然な事のやうであるが、一面には又作爲的な文章でもあるやうである。しかし一應これを認めるとするならば次のやうなことが言ひ得る。即ちこの年には彼は既に俗人行光ではなく、随つて繪所預以下の官職などは一切棄てて法名閑樂なる法體であり、そのため當然その家督はその子光重に譲つてゐることが知られる。

私は遺憾ながら行光がこの閑樂を稱したことに就ては、他に何等の史料をも持たない。しかし畫人一生の經歷としてはかかることはあり得ることであり、むしろそれが自然の順序であると言ふべきであらう。一般問題の中にこの出來事を照應さしてみても、この時代にこの系統の畫人がかかる法名を附ける習慣であるとは必ずしも言ひ難いのみならず、むしろ通字としても類似が少なくと言はねばならぬけれども、長隆が快閑と稱したといふ傳説^{註十}とは上下があるにしてもやや相似たるものと言ふべきであらう。しかし決してそれによつて、彼の閑樂説を肯定する材料にはならないのである。

その上に、彼が最初に史上に現はれる正平十五年^{延文五年}から數へるならば、この康應元年は三十年目に相當し、且又、若し文和年間を認めるならば確實に四年、或は八年を増加することとなり、約三十數年に亙る晩年の存在が立證せられることになる。延文の頃を四十歳

頃と假定すれば、長命をする場合には不自然ではないけれども、少しく長すぎる嫌ひがないでもない。従つてここに右のこの史料による行光への諸解釋なるものは、一應參考として掲げるに留めようと思ふ。

私が知り得る行光關係の直接史料は以上に盡きるが、それを基にして最も確實に言ひ得ることは、正平十五年より建徳二年に至る十二年間の存在であつて、此期間は職は繪所預であり、官位は越前守、刑部少輔で從四位上にまで陞つてゐる。或は又正平九年前後から約廿年間の存在を確認しても誤りではないであらうし、或は又、前述の如くに畠山記の如何によつては約四十年に亙る長期間の存在を認めることにもなるのである。而してその間には、右に掲げた畫業は眞に九牛の一毛であつて夥だしい作品を描いてゐたと認めねばならぬ。當時の大和繪畫家の何れもがそれである如くに、佛畫、繪卷を始めあらゆる題材に亙らねばならなかつたことは、數個の知られたる事蹟によつてのみでも知られる如くに、多方面にその才能を働かしたに相違ない。それは常識論としても可能であるのみならず、彼の社會的地位がこれを語つてゐるものと言ふべきである。即ち當時としては甚だ珍らしい長期間に亙つて繪所預といふ大和繪畫家最高の顯職につき、従つて公家の多大の信用を得てゐることを語るものであり、又、武家との關係に於ても義詮や義滿の恩寵を得てゐるのであるからして、公武兩方面に於て重視せられてゐるのである。

而して當時に繪佛師が尙多くゐたにしても、寺院側の要望にも多く堪えたであらうことは想像に難くないのである。これを以て考ふるならば、行光の如くに畫家としての活動の輝しかったものは、吉野時代以後に於てはまづ光信を除いて比肩し得るものがないと言はねばならぬ。されば光信も亦、彼を以て「吾先祖行光」と稱したのであらうことも諒解せられるであらう。一覽の便宜のために行光の年表を添へておく。

2011	六	官	職	事	項
(貞和五)	正平四				
(觀應元)	五				
(繪所預ハ藤原隆繼)					
2012	七				
(文和元)	八				
	九	繪所預		大芋社事件	(土佐文書)
	十				
(延文元)	十一				
十二					
十三					
十四					
2020	十五	繪所預		越前守	大芋社事件
(康安元)	十六				(土佐文書)
(貞治元)	十七				
十八		繪所預		越前守	大芋社事件
十九					(土佐文書)

2030	建徳元	繪所預	從四位上	極樂寺本尊居	(岩清水文書)
二二		繪所預		義經繪作	→藏繪作
(應安元)	二三	繪所預		看聞御記	(鹿苑院元服記)
二四				櫛手中畫作	
2032	文中元	繪所預	刑部少輔	曼荼羅圖作	(門葉記)
			鎮守勸請	(吉田家日記)	
2035	(永和元)	天授元	(繪所預ハ巨勢行忠)		
2049	(康應元)	元中六	法名閑樂	繪圖作	(畠山記)

註一〔土佐文書〕

繪所越前守行光申、丹波國大芋社下司公文兩職已下名之事、申狀具書如此、久下帶刀丞等、并聖曉律師押妨云々、太不可然、早荻野六郎左衛門尉、相共荻彼所、退件輩之妨、沙汰付下地於行光、可被執進請取狀、使節更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

延文五年十二月二日

中澤掃部大夫殿

相模 (細川清氏) 守 (花押)

註二〔土佐文書〕

繪所預越前守行光申、丹波國大芋社下司公文職等事、於石籠寺軍陣、雖宛行聖曉律師、社領難成人給之間、就度々、繪旨被返下畢、而爲社家恩補、可被免下地知行之由、乍捧請文、忘彼契狀、相語久下帶刀丞、敵對本所、匪啻押領兩職刺違亂惣庄之由、就訴申、去文和延文度々施行之處、監妨未伏云々、好而招罪過歟、所詮爲公家武家役人忠節異他之處、依聖曉以下輩濫吹、及重色闕如之條、願招重科者歟、早件兩職、退聖曉等押領、嚴密沙汰付下地於行光、來月十日以前、可執進請取、更不可

仁木兵部少輔殿

有緩怠之狀如件

貞治二年正月廿八日

(花押)

註三 『石清水文書』に「建武回祿之記」として、或は『男山考古録』の極樂寺の項に「緣事抄」を引いて、共に同一記事を掲げてゐるが、それは石清水關係記録として當然のことである。又、東洋美術大觀には、この建武回祿之記を引いてゐるのは、大村西崖氏の博學を如實に示すものとして敬意を表さざるを得ない。

註四 (看聞御記)

永享十年六月七日、○上 抑内裏より地藏驗記繪一合六巻給、室町殿御繪云々、此間御不豫本復御養性之間、御つれなくさめニ繪有御尋、繪有御尋、是へも奉、雖相尋未出來、室町殿へ被申聞被進云云、此繪奥書云の如し、殊勝繪也、地藏驗記流普繪ニハ聊替所あり、同事もあり○下 同八日 地藏繪返獻、又十二神繪被下、電覽則返進、又九郎判官義經奥州奉衛等被討伐繪十巻給、室町殿被進繪也、殊更殊勝握無極、伺參議拾遺行忠卿、繪所從四位藤原朝臣行光筆也、男共祇候覽之、行豐朝臣讀詞○下

同九日 繪覽之慰徒然、繪銘奉衛征伐繪也、大事之御繪之由念返進右によつて地藏靈驗記と奉衛討伐との兩繪巻は足利義教の畫庫にあるものであることが知られる。

註五 (宣胤卿記) この記事は『考古畫譜』にも『扶桑名畫傳』にも引用されてゐるが、多少の誤謬があり、且又、本日記は内閣文庫の架藏に係はり閱覽の機會も少ないであらうから、左に記す。

永正十四年十一月廿七日、晴、太平記四十冊、今日一見畢、此内第四巻ニ、宣明卿奉^{アツカリ}預^ニ後醍醐院四宮^ヲ八歳事、當流面目也、其段詞多所^{元弘二}書^{千卯}拔別紙^ニ也、又寶篋院殿義詮御上洛之時、御^ニ借住同卿^ヲ宿所^ニ、彼卿御記分明也、太平記無此事、可謂無念、彼御記應仁亂紛失、彼私宅者至余居住、應仁亂焼失了、八代之舊宅也、令切媛者給御太刀之切目有、又令所持之屏風和歌并御遊等繪、其年號不審之處、太平記第四十巻、貞治六年三月廿九日、中殿御會人數等分明也、此屏風其時節物歟、古物也、繪ハ當時繪所光信朝臣先祖光行書之由、光信朝臣先年稱之、詩謔者爲秀卿手跡歟之由、爲廣卿演說之、爲秀卿ハ貞治之御人數也、此中殿御會此度以後無^レ之○下

藤原行光考

註六 (鹿苑院殿御元服記) 應安元年四月朔日

御櫛手巾、長六尺、横三尺六寸、加賀絹三幅、文白菱、繪所行光畫進之

註七 (門葉記) 安龜法四

一 御本尊圖畫事

兼日被召進繪所行光之間、委細密々被仰含也、御本尊曼茶羅被渡遣之、殊可祕藏之由被仰之云々、畫師承元等皆佛師也、今度相違了、於長日御修法御本尊等者、繪所必奉圖也、然者不可守一隅歟、只以祕密可爲詮要者哉、

絹二幅也 是寛元曆應例也、承元弘長者三幅、

中尊、黄金色、定印但鉢印也、是承元寛元曆應等

八大菩薩如常^{具如藥師抄、承元ハ現行歟、但金剛手像八大菩薩マタラ經說不持鈴、杵許也、地藏像又色被}仍金剛手可書、加左手鈴之由被仰云々、於地藏者顯非白黃色歟、只如自^{善薩見タリ、文殊ハ金色勿論也、仰云、今度圖以西山宮御抄圖被爲本了}兩明王^{右方三世不動首陀會天寶蓋縛日羅寶瓶等同如藥師圖、不動兩目開之、色青黑如常}

此事予兼日粗令^口阿闍梨了、長日御修法御本尊傍例安鎮本尊准據始如有師訓、仍申入了、爰其後阿闍梨御參内之次、太有符合事云々、今度爲修理取破御殿之時、自天井上求出御本尊^圖則是今祕藏歟之由有勅語、即拜見之處、曆應護摩之本尊無疑也、

仍此御本尊今度修中即如元可奉安也、承元例如是也、相構不散失様先可被取置之由申了、後曼茶羅不動正是兩開眼也、仍如然即被仰畫師歟、愚昧之推義自叶先師之賢感、爲悅爲幸。

この曼茶羅圖は、修法終了後は嚴重に箱に納めて、道場の天井の中央西虹梁に打付けて保管されたのであることが、同じく本文の末尾に記されてゐる。従つて紫宸殿回祿と共に何時の頃か焼失せるものと認定せざるを得ない。

註八 (吉田家日次記) 應安四年八月廿八日

吉田家は神官であるからしてこの記述あるは當然である。「談合行持之間」の意味は明白に通じないから、暫らく大略的な理解をして置く。

註九 現在行はれてゐる所謂足利季世記にはこれに該當する記述がないけれども、考古畫譜が引用するところであるから、何れ詳しく調査してみたいと思つてゐる。しかしその内容なり畠山記そのものへの反省は大いに必要であると思ふ。又「繪師越前守行光」とあるも、それは前官前名を修飾として用ひたまでで、主體は「入道閑樂」にあることはいふまでもない。

註十 「辨玉集」「長隆 姉小路法眼快閑〇下」とあるが、そのこと自身が既に何等の積極性がないのである。

三 行光の傳稱作品

行光の作品として如何なるものが残つてゐるか。前項にて掲げた不動尊曼荼羅圖は勿論烏有に歸したであらうが、正平廿二年に描ける六卷の地藏靈驗記繪卷はどうであらうか。現在矢田寺の矢田地藏緣起二卷を始め善惡合せて數點の作品が遺つてゐるけれども、不幸にして六卷完備の地藏緣起は未だ紹介されてゐないやうである。

しかし幸にしてこの行光本が殘缺となつて傳存してゐるとしても、その奥書を失してゐるとすれば、今日に於てはその基準の行光作品がない限りは、夫等の中から行光眞蹟を選択することは殆んど不可能事に近いと思はれる。ただ看聞御記にも流布の地藏緣起繪卷と異なる所もあると言つてゐるにしても、このいわゆる當時の流布本なるものの本體が不明であるから判らないけれども、六地藏を始めとして地藏信仰の甚だ旺盛なる時代であるからして、行光が描けるものが何寺の緣起であるかも亦知る由がない。同じくこの地藏緣起繪卷と共に鑑賞された義經泰衡討伐繪十卷といふ奇妙なるものも傳ふる所がない。帝室博物館所藏の義經奥州落と稱する繪卷の摸本が何等か關係するのではないかとの想像も行はれるが、これとても行光の畫蹟を考ふる上には餘りにも遠いものである。長享三年頃に宮中に

あつた十王圖註一十幅はその眞否の如何は知らないけれども、當時行光の作と傳へられてゐたものであるが、現存十王圖と關聯せしめて考へる契機がないのである。

其他に江戸時代、特にその末期頃から行光に歸屬せしめて考へられる作品は割合に數が多いのである。例せば、

手長足長御障子(土佐系圖)

悠紀主基屏風(土佐系圖)

鎌足公定慧和尚不比等公像(考古畫譜)

義經群高松圖(倭錦)

羅漢像(倭錦・圖畫考)

兒文殊像(圖畫考)

駿牛繪詞異本殘缺(尙古圖錄考古畫譜)

金蓮寺一遍聖人繪傳(寺社寶物展閱目錄)

高野山弘法大師繪詞(倭錦・圖畫考)

誓願寺緣起繪(考古畫譜)

高館合戰繪詞(考古畫譜)

北野天神緣起繪(倭錦・土佐系圖・寺社寶物展閱目錄)

天狗草紙繪(倭錦)

知恩院法然上人繪傳ノ十數段(考古畫譜)

太子傳繪(圖畫考)

中殿御會圖(宣胤卿記)

八尾飯盛龍泉城圖(畠山記)

右の中、中殿御會圖と河州三城繪圖とは傳説も古いから、遺品があれば多少の暗示を得るかも知れないが、それに該當するものを聞かないし、高館合戰繪卷は墨書の略摸が博物館にあり、行光筆の書

入があるけれども参考にもならない。其他の現存品は何れも時代上から言つて行光を考ふることが出来ないものであるが、その中で時代的に合致するものとして、野山弘法大師繪卷六卷あり、私説としては天狗草紙繪及び知恩院法然繪傳などがあるけれども、行光の個性の問題としてはこれ以上に論を進めることは不可能である。最後に特記すべきは、右にも掲げた北野天神緣起繪卷であつて、これが現存の何本を指すかは土佐系圖などでは不明であるが、考古畫譜などに至つて帝室博物館の一本を意味してゐるやうであり、更に現在の北野神社所藏の二卷本を指すやうになり、この説が廣く行はれて國寶目錄などにも「傳行光筆」と註記するに至つてゐる。而してこの二卷本を呼ぶに行光本などと稱する言葉が往々にして行はれてゐるやうである。しかし思ふに、この二卷本はその畫圖の技法様式などから言つても、その詞の「弘安の今に至るまで」を肯定すべき性質のものであつて、弘安本と稱されることが合理的であるものである事は廣く承認されてゐる如くである。かく一方に弘安本と言ひ乍ら一方に行光本とも言はれることは、全く時代を無視したるものであつて、弘安年間に別人の行光の存在を認めるならばいざ知らず、行光を以て如上の人物とするならば、この北野天神緣起繪卷を行光本と呼ぶ習慣こそ全く不合理な傳説と言はなければならぬであらう。

要するに遺品上では行光の畫蹟は何一つ認めることが出来ないのみならず、それらしいもの、随つてその畫風的一端をも窺知するべ

き材料がないのである。その故に文獻上では非常に重要な輝やかしい存在であつたと認むべき行光が、作品の上に於てもそれに相應はしい力量を示したか否かは全く言ふべき限りではないのである。

註一 「實隆公記」長享三年五月七日

今日和劑方指南談義也、仍參入、伏見殿、仁和寺宮、青蓮院宮、梶井宮等參給、又於黒戸十王圖拜見十補、筆跡殊勝春日繪所行光、百四、驚目者也、及晩退出。

註二 「筆者越前守藤原行光、詞三品行忠郷、右者嶋津家ニ有之」云々。模本閱覽に就ては秋山光夫、鷹巢豐治兩氏に深謝す。

四 行光のもつ諸問題

以上述べた如くに、この行光は吉野時代を代表する第一の畫人であつたと思ふ。しかしそれにしてもその遺作の考合すべきものが何一つないのであるからして、少しく枚數を長く費しすぎた嫌ひがあるけれども、私がこの行光を以て重要視する所以のものは、實に土佐派乃至は土佐家としての一連の中に彼を觀察する點に存するのである。その故に、この行光論は「土佐家起原論」に於て再び論ずる豫定であるからして、その方面のことは多くを語らない。

しかし行光の傳歴的方面に即して言へば、彼は何時から繪所預になつたのであるか。即ちその前任者は誰であつたか。或は彼は何時繪所預を辭したか。即ちその後任者は誰であつたか。この二つの問題は行光自身の方面からの材料は何一つないにしても、繪所の補任史から前任と後任の兩者を研究してゆくことによつて、これを限定

してゆくことが出来る。即ち行光傳の確實性を更に増加することが出来るのであるが、この一節がシリーズをなすのであるから、そのことは行光の直前、直後の作家を題目とした時に觸れることにする。しかし一應觸れておくならば、正平四年^{貞和}五年には藤原隆繼、天授元年^{永和}には巨勢行忠が夫々に繪所預であるからして、行光が繪所預としての歴史は既にその上下限が限定されてゐるものである。併せて繪所預領の問題が考へられる。しかしこれは直接には美術史の課題を離れるけれども、これあるがために競望者も輩出するのであり、生活の基礎として最も安定したる一部をなすのであつて、必ずしも吾々からも輕視することが出来ないが、強いて言へば美術經濟史とでもいふべき問題に屬する。又それと共に前に言つた如くに木佛師との一種の確執の問題ともなつてくる。

しかしこの繪所といふ職の前任者後任者の問題と、彼の父或は祖父などの血脈的な家系の問題とは自ら性質を異にする。そこに彼の先祖は何人であるか。又彼の子は光重であることは觸れたけれども、その子孫の血脈上の直系はどう繼續してゆくか。或は又、この血脈乃至は家系とその畫系との間には自ら多少の相異があるものであつて、彼の受續し授繼した畫系は如何。これを要するに何れも廣義の土佐派或は土佐家の問題に還元して言ひ得るものである。^{註一}

その詳細は別に論ずると言つたけれども、その核心を言ふならば、後の時代にいふ土佐派といふ畫體乃至畫風の意味から言へば、彼は勿論土佐派に屬してゐたことは否定出来ない。而して又その立場

から言へば、豈行光一人ではないのである。しかしその意味での土佐派の主體者であつたことは確實である。しかし家系と畫系と一致したる土佐家即ち土佐派の成立が既に行はれてゐたものであるか。即ち土佐系圖の如くに、彼は古い土佐家の吉野時代の一人にすぎなかつたのであらうか。

確實なる史料の綜合に於てはそれを否定しなければならない。彼は土佐家を稱し或は興したものでなかつたのである。即ち土佐といふ家の稱號は彼によつては尙未だに用ひられなかつたと認めねばならぬ。彼が中御門を稱したことは前述の如くである。^{註二}果して土佐といふ所謂苗字は何時誰人によつて用ひられたか。

註一 福井利吉郎教授も岩波版「日本文學講座」中に數言觸れておられ、その識見の高きには敬服せざるを得ない。

註二 藤原光長の常盤云々の言葉と對應して考へると興味ある課題である。